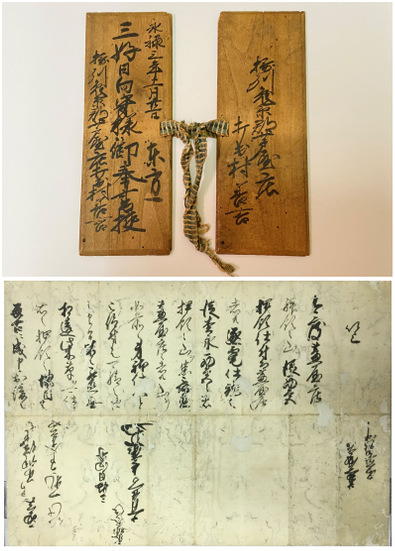
学芸員コラム | vol.04
2022年10月1日発行

芦屋の戦国時代

室井康平



『三好長康山論裁許状』芦屋市立美術博物館蔵

城山（鷹尾城跡）から西宮方面の眺め（筆者撮影）

越水城跡の碑（筆者撮影

『三好長康山論裁許状（附、挟板）』という芦屋市指定文化財があり、当館で所蔵しております。これは、芦屋近辺の山の利用について支配者より許諾を得たという証拠の書状です。後に江戸時代にも山の利用を巡って争いが起こった際にこの書状を代官所に提出して、利用を認めさせたということもありました[註1]。

この「三好（家）」というのは、近年では、織田信長の前の「天下人」と呼ばれることが多くなってきた三好長慶をはじめとして、近畿一帯（畿内）を支配した戦国時代の一大勢力になります。今回は、芦屋の戦国時代や三好家の台頭を少し紹介したいと思います。

芦屋の戦国時代は、交通の要衝として西国街道が通っていたように、非常に人の行き来が多い土地柄のため、幾度か戦乱に遭遇しています。瓦林正頼という武将が、芦屋市西方に鷹尾城を築いたり、芦屋河原の戦いに参戦しますが、これらは、室町幕府の権力争いの一環として行われたものでした。

戦国時代の始まりとされる応仁の乱後、室町幕府の権力は細川家が握ることになりました。応仁の乱の時に東軍の総大将となった細川勝元の子・政元は、室町幕府の将軍を補佐する管領を務め、将軍と並ぶ実力者（半将軍と呼ばれます）となります。政元の死後、実子がいなかった為、3人の養子（澄之、澄元、高国）が後継者争いをすることになり[註2]、政元の葬儀を即座に行った細川澄之が細川家の後継者と自称します。しかし、3人の養子のうち唯一細川家出身ではない澄之は、細川澄元によって討たれます。当然、澄元が細川家の後継を名乗るところ、もう一人の養子の高国が異議を唱えます。これにより、澄元と高国の勢力争いが起こり、足利将軍家も巻き込んだ長い争いが始まります。この争いを「永正の錯乱」または「両細川の乱」と呼びます（1509～1532年）。

対立の構図は、下記のように進んでいきます。
◎細川高国、足利義稙（10代将軍）[註3]、
　大内義興（周防国、長門国守護）[註4]
★細川澄元、足利義澄（11代将軍）、
　三好之長（澄元の出身家・阿波細川家の重臣）

先に細川家の当主を名乗った澄元が京にいたところ、高国と大内勢が近隣勢力と呼応して、当時の将軍・足利義澄、澄元、三好勢を追放します。高国らは、前将軍の足利義稙を再将軍に据えて、京の覇権を獲得します。しかし、近隣勢力との対立が続き、一度京を追放された澄元らが勢力を盛り返します。阿波国で体制を立て直した澄元及び三好勢が反撃を開始し、堺と兵庫の二方面から侵攻。淡路、播磨の有力勢力を味方につけ西国街道を東上します。ここで、高国側の武将である瓦林正頼が澄元勢の上洛を阻止するため、芦屋市の西部に鷹尾城を築城し迎え撃ちます。この戦いは芦屋河原の戦いと呼ばれ、瓦林勢は一度澄元側を撃退する活躍も見せましたが、最終的に鷹尾城が落城し澄元側の勝利となりました。堺から上陸した軍勢も京へ侵入し、高国側を京から追放しました。

その後は澄元、高国がそれぞれ京の覇権を争い続けます。高国が澄元勢力を京から追放した後、澄元が死去。高国が権力集中を図る目的で、鷹尾城で戦った瓦林正頼を粛清するなど行いますが、澄元の子・細川晴元が勢力をつけて京へ侵攻。最終的には高国は現在の尼崎市の大物で自害しました（大物崩れと呼ばれます）。長く続いた細川家の対立は終了しましたが、今度は晴元と家臣が対立します。

この対立によって、晴元の重臣を担った三好元長が討伐されますが、この元長の子こそが三好長慶であり、一度は晴元に従ったものの、やがて対立。ついには、細川高国の子・氏綱を擁立して晴元を追放し、京での支配を確立します。この後、近畿地方一円で勢力を拡大し、1564（永禄7）年に死去するまで、「天下人」として君臨することになりました。

実は、この三好長慶ですが、細川晴元の家臣の頃に西宮市にあった越水城[註5]を治めていました（1539（天文8）年～1552（天文21）年）。西宮神社の門前町として栄えていた西宮と、阪神間を含めた地域の支配権を得ます。この阪神間の支配こそ、三好長慶を「天下人」へ押し上げる大きな要因となったのです。

三好長慶は、越水城の後は、飯盛城（現・大阪府大東市、四條畷市）、芥川山城（現・大阪府高槻市）などに居城を移していきますが、越水城をはじめ、この阪神間に自らの重臣を数多く配置しました[註6]。西国街道が横断し、西への交通の要衝だったこと、西宮などの栄えた町があったことなど、この地域が戦国時代も重要な土地だったことが窺えます。

（むろいこうへい　芦屋市立美術博物館学芸員）

註
1　挟板に「三好日向守」と記されており、文中にある三好長康という人物は、当時日向守を名乗っていたとされる三好長逸（ながやす）の可能性が窺えます。
2　細川政元は修験道に没頭し、生涯独身を貫いたとされています。
3　将軍を一度退任し、11代義澄の将軍退任後、再び将軍に就任しています。
4　現在の山口県を中心に勢力を持ち、強力な軍事力を有して幕府の権力争いに参戦しました。
5　越水城は瓦林正頼が築城し、細川高国方の重要拠点とされていました。現在の西宮市立大社小学校付近に存在したとされています。
6　越水城には、長慶の拠点移動後、重臣である松永久秀が入城したとされています。

［参考］
天野忠幸　『三好一族』中公新書、2021年
芦屋市教育委員会　『新編　芦屋市史　資料編1』1976年